

神主となまず

神社やお寺を巡ることが趣味である健一は、インターネットで神社仏閣じんじやぶつかくあいこうか愛好家たちが集う口コミサイトに、ある山の上に変わった石像が祀られている神社があると投稿されているのを見て興味を抱いた。好奇心旺盛な健一はその神社に訪れようとしていた。細い山道をひたすら登り長い階段を登りおえると、その先にはそれはとても小さな神社があつた。辺りは、少し薄暗くぽつぽつと雨が降っていた。健一は息を切らして、中腰になり手を膝につきながら言った。

「ふう：やっとたどり着いた。こんな山の上にあるなんて：だれが何を参拝するために訪れるんだ。」

すると、神主と思われる少し年老いた男が近寄ってきて健一に声をかけた。

「おやおや：、若いお方ご苦労様です。ご参拝でございますか？お見掛けしたところお百姓様ではないようですが：。」

「あっいえ私は神社やお寺などを巡っており

まして、ここには珍しいものが祀られているというのを聞いて、一目拝見したいと思い訪れたんですが。」

「ああ、なまずさまのことですか。それでわざわざこのような山の上までさあさあこちらです。」

「なまずさま：ですか？」

神主は、健一を神社の境内の奥へと導いた。すると、そこには両手を広げたぐらいの大きさの大きななまずの石像があり、お賽銭箱も設置してあった。立札には、「なまず雷神様」と書かれていた。

「これは確かに珍しいですね。馬や牛の石像が祀られているのは見たことありますが、なまずは初めて見ます。雷神？雷様ですか？雷様という太鼓を背負った鬼のようなものを想像しますが。」

健一のことばに神主は答えた。

「そうですね、ですが旅のお方どこかは存じませんがなまずが祀られているのはここだけ

じゃないようですよ。」

「あっそうなんですか？それは勉強不足でした。」

すると、神主はにっこり笑みを浮かべながら言った。

「ただ、このなまず様はちゃんと経緯がございましてな。よろしかったら、せかつくこまでこられたんですこのなまず雷神様のお話をさせて頂きますので社務所でお茶でも召し上がってゆつくりしていかれませんか？」

「いいのですか？ではお言葉に甘えさせていただきます。」

健一は社務所の中に入り、用意された座布団に腰を下ろした。神主は、お茶を健一の前に差し出し横で正座をして話し始めた。

「私は神主の秀栄しゅうえいと申します。失礼ですが、あなた様のお名前は？」

「僕は上方健一かみがたけんいちと言います。」

「上方様、ここは山のとっぺんで常に雨雲がかかっているようなところです。そのことか

らか、昔からここには雨乞いの神様として竜神様が祀られておりましてな、なまず雷神様を祀っている横の小さな社殿が竜神様です。昔は小さな社殿にポツンと祀られているようなものでした。今のように社務所や私のような神主はおりませんでした。日照り続きで雨乞いを願うお百姓さまがわざわざ山を登って訪れてご参拝に来られるのです。」

「ああ、なるほどそれでさきほど僕をお百姓さんじゃないかと……」

「こんな山の上ですが、昔からちゃんと管理している神主がおったんです。神主が竜神様の掃除に訪れた時に、ほんのたまに竜神様の近くに息絶え干からびたなまずが落ちていたりときがありましたな、不思議に思いながらも、神主が竜神様の近くにそのなまずを埋めて供養してあげておったんです。」

「なまずの死骸ですか？こんな山の上に。なまずは普通沼や川などにおるものですよね。でも、そのなまずの死骸を埋めたことと雷様

はどう関係しているのでしょうか。」

神主は、またにつこり笑みを浮かべながら健一に言った。

「まあまあ、そう急がれるな長くなりますから、お茶でも飲んでお聞きくだされ。」

健一は、神主の言われたように一息入れ一口お茶を飲んだ。

「これは先代から聞いたお話でございます。ここになまず雷神様の石像を置き祀られ、社務所を作られた神主様のことをお話ししましょう。この山の下った先には小さな村がありましてな、その村にある小さな神社がここを管理しております。昔、その村で空が荒れ雷がなり大雨が降った時のことです。」

―【雨がやんで村の百姓の伊助いすけの家の前で飼っている犬の五郎がやけに吠えているので、伊助が家の外に出てみると、伊助の畑のど真ん中に大きな穴が開いていた。伊助が穴をのぞき込むと、穴はそこが見えないほど深かった。伊助はこれは大変だと思い、急いで村の

相談役でもある神社の神主の宗そうのところへいき事情を話した。宗は、伊助の畑までかけつけた。宗は、穴をのぞき込むと、穴の底からかすかに声が聞こえた。

「だれかあ、わしを助けてくれ……。――」

宗は、声を聞き慌てた。

「大変だ、誰か穴に落ちているぞ！」

「そんな、まさか……。――」

横にいた伊助は、穴をのぞいて大きな声で叫んだ。

「おーい！だれかいるのか！」

――わしをここからだしてくれ――

宗の耳にまた声が聞こえた。しかし、伊助の耳には何も聞こえなかった。

「神主様、何も聞こえませんか。気のせいじゃないですか。」

宗は言った。

「いやそんなはずは、確かに私には声が聞こえる。」

宗も、穴に向かって大声で叫んだ。

「誰かおられるのか！私は村の神社の神主の宗と申すものです！」

すると穴の底からやはり宗の耳には声が聞こえてきた。

「おお、わしの声を聞こえるものがおるのか。」

わしは、雷じゃ！頼むわしをこの穴からだしてくれんか。」

宗はその声の内容に驚いた。

「今なんと？雷と言ったか？」

続いて穴に向かって宗は叫んだ！

「雷というのは、あの空におられる雷様のことですか！」

「そうじゃ、その雷じゃ」

穴の周りには何事かと駆けつけた村人たちが集まっていた。宗は、村人たちに言った。

「大変だ、雷様が穴の中に落ちてしまったようだ。」

村人たちはざわついた。伊助は、笑いながら言った。

「雷様ですと？そりやこの穴は雷が落ちてできた穴でしょうが。雷様？あの角の生えた？そんな馬鹿な。」

「とにかく、私には穴から出してほしいという声がきこえる。だれか長い縄をもってきてはくれないか。」

伊助は、宗が必死に訴えるので仕方なく近くにある家から長い縄を持ってきた。宗は、縄を持ちながら大きな声で穴に向かってまた叫んだ。

「雷さま。今から縄を降ろしますから登ってきてください！」

すると、すぐさま穴の中から返事があった。――宗とやらすまぬが、降りて来て私を外に連れ出してくれぬかあ。わしは自分で登れるよ。うな手がないのじゃ。――

宗は言葉の意味がよく分からなかった。

伊助は、宗の様子がおかしいので聞いた。

「あ、の、神主様。雷様はなんとおっしゃてるのですか？」

「いやゝ、登れるような手がないので私に降りてきて連れ出してほしいと。」

伊助は、また驚いて言った。

「なんとゝ、雷様は手がないのか？ いったいどんな姿をしているんだ。」

宗は伊助と村人たちにランプを持ってきて貰い、畑の近くの木に縄を巻き付けしつかり結び付け、穴にゆつくりと縄を降ろしていった。

宗はやれやれと思いながら縄を握りしめ村人が持ってきてくれたランプを腰にひっかけ、穴の中へゆつくりと降りていった。宗が、暗い穴の中を降りていくと暫くして足がついた。

腰のランプを手に取りかざすと穴の中には何も見えなかった。しかし、足元のほうから声がした。

「おお、そなたが宗か。早くここからだしてくれ。」

宗は、声のあるほうをランプでかざした。「なんとゝこれは、おまえさまが雷様ですか？」

宗は、雷様の姿を見て驚いたが、雷様を連れ
また縄を登り始めた。伊助と村人たちは縄を
持ち皆でひっぱった。伊助も村人たちも、恐
ろしい雷様が穴から現れたらと思うと息をの
んだ。穴から宗の手が見えて、宗は穴から抜
け出しあがってきた。伊助と村人はキョロキ
ョロ見渡した。伊助の隣では、犬の五郎が宗
に向かってわんわんと吠えていた。

「あのゝ？ 神主様、雷様はどこにいなさるん
で？」

宗は、服の胸元に入れ込んだ黒いものを取り
出し皆に見せた。

「このお方が雷様だそうだ。どおりで縄が登
れないわけだ。」

伊助も村人も目を疑った、なんと宗が穴から
連れてでたのは大きな黒いなまずだった。伊
助は腹を抱えて笑って言った。

「はははははっ！ 神主様、いくらなんでもこ
れが雷様とは。こりゃ、どうみてもなまずで
はありませんか。」

「伊助、笑ってはいけない。まあ、無理もないが……。どういうわけか私にはこのなまず：いや雷様の声が聞こえる。今からこの雷様を、竜神様のもとへ連れていかねばならない。」

「竜神様？山の上の竜神様のことですか？」

伊助の言葉に、宗は返答した。

「そのようだ、雷様がいうには竜神様のもとに連れていけばお空へ戻れるそうだ。」

宗は伊助に深めの桶に水をくんで貰い、その中になまずの雷様を入れ山を登った。――

健一は、いつのまにか秀栄の話に聞き入ってしまった。――

「それで、その宗という神主様がそのなまずを竜神様のもとに連れて来られてここのなまず雷神様ができたんですか？その話本当なんでしょうか？その話からすると雷様はなまずということになりますよね？なまずが雷様なんて聞いたことがないです。」

神主の秀栄は、自分も一息入れお茶を飲んだ。

「宗殿がなまずに聞いた話では、雷様は元は電気なまずでどのなまずよりも電気を起こし長生きできれば竜神様に認められ雷様として空に迎えられるとか。でも、勢い余って雷を起こしすぎて落ちてしまうことがあるそうです、地上に落ちると元のなまずの姿になり電気も失うとか。」

健一はまた、少し笑いながら聞き返した。

「ははは、雷が落ちて傍になまずがいたんてのも聞いたことがないです。」

「そこです、これも宗殿がなまずから聞いた話ですが、大体は落ちる時に稲妻で焼け焦げて姿形なくなってしまうか、助かって宗殿のように声を聞こえる者がいない為気付かれず動物の餌になってしまうそうです。中には、人間は無理ですが動物にはなまずの声が聞こえるようで、なまず様に頼まれた動物が口に加え竜神様のもとへ連れていってもらうなまず様もいるそうです。」

「ああ、なるほど：それでこんな山の上でも

なまずが。理にはかなってますね。それで、その宗さんが連れて行ったなまずはその後どうなったのでしょうか」

秀栄は、また話の続きを話始めた。

「宗となまず姿の雷様は、竜神様を祀っている社殿のある階段にたどり着いた。

「もうすぐですぞ、雷様。もうすぐ竜神様のもとにたどり着きますから。」

宗が階段を上る度、空には黒い雲がかかりはじめ辺りが薄暗くなってきた。竜神様のもとにたどりつくのと、なまずはぴよんと桶から飛び出した。

「あつ雷様。どうするんです？」

なまずはくねくねぱたししながら竜神様のもとへ近づいていった。なまずは、一瞬宗のほうへむくとまるでおじぎをするかのように体を曲げた。その瞬間、空がピカッと光りゴロゴロなりだし雨が降り出した。宗がなまずのそばによるとなまずはもうピクリとも動かなかった。宗は空を見上げて言った。

「空に戻りなさったか。それにしても、たまに見かけるなまズの死骸が雷様の抜け殻だつとは……」

空はゴロゴロゴロなりまるで喜んでいるように聞こえた。宗は、いつものように竜神様の近くに、なまズを土に埋め手を合わせた。

宗が、村に戻ると畑の穴は綺麗に埋められていた。宗は、なまズのことを忘れてはいけな
いと村の彫刻屋に頼みなまズの石像を彫つて貰い、竜神様の近くに「なまズ雷神様」として祀った。そして、なまズがまた空に戻る為やってきたら供養してあげなければなるまいと社務所を作り村と山を度々行き来するようになった。」

「……というわけでここにはなまズ雷神様が祀られているわけです。」

「はあ、なるほどそういうことですか。ところで、神主様は竜神様の近くでなまズを見つけたことがあるのですか？」

秀栄はすぐさま答えた。

「ほほほ、いえ残念なことに。私が神主について三十年以上経ちますが、なまずは一匹も見たことも埋めたことはありません。」

「そうですか、有難うございました。楽しいお話を聞かせて頂きました。」

健一はそういつて、社務所を出るとなまず雷神様と竜神様にお参りをして、一、二枚なまずの石像の写真を撮ると秀栄に頭をさげ階段を下って行った。健一は降りながらぶつぶつつぶやいた。

「なまずが雷様ねえ……。うまく作られた迷信話だけど、そんな迷信のために神主さんもこんな山の上まで度々登るの大変だなあ。」

そう言ったときです。辺りが突然暗くなり黒い雲がかかりはじめたと思うと、健一が降りている階段の横で何かが跳ねているような音が聞こえた。パタン、ピッチャンパタパタ

「なんだ？狸でもでたか？」

健一が音のする茂みの方に近寄ると黒い物体が勢いよく体をくねくねとさせ音を立ててい

た。
。

それは、大きな黒いなまずだった。
。